記念講演

「嗜好品と神話的世界」

千葉大学名誉教授／文化人類学　武井 秀夫

第 11 回嗜好品文化フォーラム「嗜好品・脳・こころ」
京都新聞文化ホール
平成 25 年 5 月 18 日

嗜好品化する以前の嗜好品たちと神話的世界

新大陸、特に南米はジャガイモやキャッサバなど有用植物の宝庫である。現在の我々の嗜好品のうち原産地が南米であるものも多い。今日はタバコ、コカ、トウガラシ、ヤヘについてお話ししたい。

健康に悪いとされながらも、現代の嗜好品の一つの代表であるタバコには多数の製品があると同時に、紙巻タバコだけでなく、葉巻、噛タバコ、嗅タバコ、水タバコ等の多様な利用法が存在している。世界に広がらなかった唯一の利用法は、葉を煮出してそれを浣腸するという方法くらいだろう。

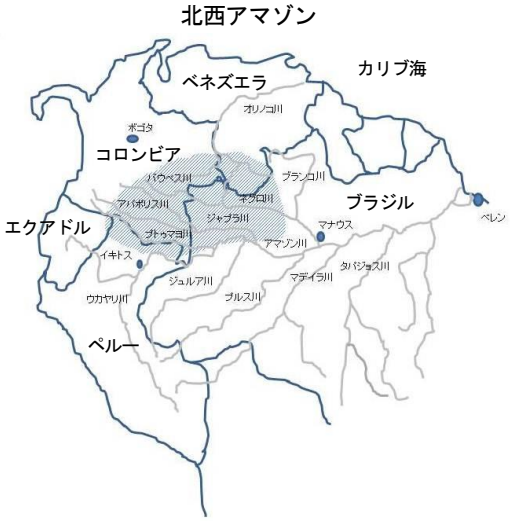
コカは、葉に 14 種類のアルカロイドを含み、その一つがコカインである。世界中で広く愛好されている嗜好品の一つ、コカ・コーラの初期の原料の一つはコカの葉のエキスであり、コカインも微量に含まれていた。

第 3 のトウガラシは、言うまでもなく、調味料の必需品である。北西アマゾンでは、肉や魚の味付けは少量の塩と大量のトウガラシが定番である。野生種も含めて多くの品種がある。

南米で特筆すべきなのは、ヤヘ（現地語カピ、またはカーピ）という幻覚剤である。アマゾン川流域に自生する蔓植物の樹皮から作られる。煮て濃縮することもある。先住民たちの儀礼で使われてきたが、最近この儀礼体験を売りにしたヤヘ・ツーリズムが一部地域で盛んに行われ、商品化される傾向が生じている。

ここにあげた 4 つの植物は元来、神話的に重要な意味を持っていたし、現在も持っている。今日は、これら 4 つの「嗜好品」が、嗜好品化する以前には、どういう神話的世界と結びついて存在していたのかについてお話ししたい。もちろん、現在は嗜好品化したモノとして現地の人々の間にも入ってきているので、それらの「商品」が彼らの生活にどういう変化をもたらしたか、にも触れてみたい。

北西アマゾンの先住民トゥユカ



アマゾン地域の中でも、ネグロ川より西側、アマゾン川本流より北側の地を北西アマゾンと呼ぶ。北西アマゾンの北部はガイアナ（ギアナ）楯状地という、いわゆるテーブルマウンテンで有名な特殊な地質である。北西アマゾンは文化的にも特徴があり、その一つに先ほど述べた幻覚作用を引き起こすヤヘの利用がある。

ヤヘを利用する民族の一つがトゥユカ（東トゥカノ語系言語集団の一つ）であり、コロンビア側に 400 人ほど、ブラジル側に 400 人ほど居住している。トゥユカたちの間に

は明確な性別分業がある。焼き畑耕作は主として女性によって担われ、栽培されているのは主にキャッサバ[1] と果樹である。栽培面積は女性よりずっと小さいが、男性もタバコ、コカ、ヤヘなどの霊的植物を栽培している。しかし、男性の主たる役割は狩猟、漁撈、そして焼き畑を作るための森林の伐採である。アリなどの採集は子供を含め全員で行う。以前は地域共同体を構成する全家族が、マロカと呼ばれる一つの大家屋に住んでいた(大きいマロカでは数百人が住んでいたという記録もある)が、現在は核家族ごとに小さな家屋を造り、集落を形成している。同じ言語を話す同世代の人びとは兄弟姉妹にあたるので、自分とは異なる言語を話す人と結婚するという、言語外婚が原則である。

人間誕生神話

多くの人類学者は、アマゾン的世界観は性的モチーフや、性的な力に対する言及が非常に多いと指摘する。おおざっぱに言えば、すべての存在は男／女、あるいは男性性／女性性、男性原理／女性原理というような、二つの性的要素から構成され、どのような存在であれこの両者の結合、つまり性交渉なくしては新しい世代が生まれない、というのがアマゾン的世界観である。世界の根底にあるのは、性的な性質を持つエネルギー、生成力であり、それが現実世界を支えている。この力は霊的な性格を持ち、不可視のものだが、そこから可視的な世界のすべてのものを生み出す力を持つ。そして、そうした力を統御するのが人間の言葉なのである。この考え方は人間誕生神話にも現れている。

人間誕生にあたっての「創造者」は兄弟と姉妹の 4 人である。さまざまな試行錯誤ののち、兄弟たちは呪文を唱え、呪術的な性交により姉妹を妊娠させることに成功する。しかし、妊娠した姉妹たちには外陰部も産道もなかった。胎児が育って、いざ出産という時の出口がないのである。熟考ののち、兄弟は、ムノプティセネロという道具（タバコホルダー：p.4 図を参照）を女たちの股間に当ててみた。すると、道具はそこにぴったり収まり、外陰部ができた。次は産道で、子どもたちがいるところに向けてトンネルを掘る。その時に活躍するのがキツツキである。鳥たちは、人間たちより先にこの世に生まれ、もっとも知識を持った存在であった。キツツキによる長時間の奮闘の末に最初の子どもたちが誕生する。姉から生まれたのがマサクラジャイという人類最初のシャーマンで、北西アマゾンでは一般的にユルパリの名で知られる有名な神話上の人物である。マサクラジャイは、のちに人食いの罪で殺され焼かれるのだが、焼かれたあとの白い灰からヤシの木が生えた。そのヤシの木を切り倒して作られたのが聖なる楽器ユルパリ（管楽器）である。灰からはヤシのほかにもタバコとトウガラシが生える。こうしてマサクラジャイの骨からできたものとして、楽器ユルパリとタバコ、トウガラシがあり、これらは男性性、男性的な力そのものなのである。

一方、妹から生まれたのはプティポセという名の、のちに羽根飾り一式に変身する人（性別ははっきりしない）と、人類最初の女性カピロである。カピロは、のちに身体から枝が生え、植物に変身して現在のヤヘ（カピ、カーピ）となる。

人間はこのようにして地下にある創造者の住居「乳の家」で生まれ、創造者によって地上へ持ち上げられ、さらには山で囲まれた円盤状の大地に進入し、大地を西から東に流れる大河を遡航していく。これが「神話の旅」であり、旅の途上でいろいろな事件が起こる。その中にマサクラジャイの死やカピロの変身物語も含まれているのである。遡上を続けた人間たちは、大地の中央にある大きな滝に遮られ、それ以上の航行が不能となった。遡上を諦めた人間たちは乗っていたカヌーを下り、地上での生活を始めた。神話の時代が終わり、現在へと直接つながる時代が始まったのである。

1　根（芋）を食用とする。無毒種と有毒種があり、後者は猛毒の青酸配糖体を持つ。タピオカの原料。

神話と歴史と現実

彼らにとって、神話と歴史は一続きのものである。

神話の大河を遡上する旅では、ある地点から別の地点へ移動する時は必ず水中を航行する。つまり、水中に潜っては浮上、潜っては浮上を繰り返す。そして浮上した時に上陸した場所でいろいろなものを見つけていく。水面下の世界はあの世であり、子宮内の世界でもある。つまり、妊娠、出産を繰り返して世界を生み出しながら発見していく、というのが神話の旅の構造なのである。

そういう神話の時代が終わり、人間が現実のモータルな死すべき運命を持った存在として生き始めた時から、歴史は始まったのである。神話と歴史は繋がっており、その繋がりから見れば、神話は過去であるが、それ以上の意味がある。神話の中で生じたことは現実にも繰り返し生じうると同時に、神話の中で生じなかったことは現実にも未来にも生じえない、と彼らは考えているからである。

神話は、過去の出来事を語るものであると同時に、現実の世界で生じる出来事の本質的な様相を語っているものでもある。それゆえ、現実に起こった出来事がどういう意味を持つかは、神話の時代に起こったことを知ることにより理解することができる。現実世界で、我々が目にするのは可視的なものであり、物事のうわべである。可視的な世界を一皮剥いた時に現れる“霊的な”世界こそ、本質的なものだからである。普通の人びとが儀礼の時にヤヘを飲用することによってはじめてこの不可視の世界を垣間見ることができるだけなのに対して、シャーマンは、人びとと同じ日常を生きながら、常にこの不可視の、“霊的”で、神話的世界に通じる本質的な世界をも見ているのである。つまり、世界はこの世とあの世というように二つ離れて存在するのではなく、神話的世界に通じる霊的現実は、目に見える日常を一皮剥いたその裏側に常に存在するのである。しかし、外部の者の目には明らかなことだが、神話の中で生じなかったことも現実には起こりうる。だが、その状況を彼らの側から見れば、誰も知らない、聞いたこともない新しい出来事が起こったということは、それはその部分の神話が失われていたということに他ならない。かくして失われた神話の探索が始まり、シャーマンのビジョンや夢見に現れた祖先の教示という形で失われた神話が「再発見」され、それが従来の神話の中に組み込まれていく。こうして神話は常に改変されながら、現実世界についての真正な世界知として生きられ続ける。神話はけっして過去の人びとの想像力が生み出した荒唐無稽な物語などではないのである。

身体・家・世界は、呪術的な意味で互換性を持つ

東西に長い形の集住家屋であるマロカには、男性が使う出入り口（東）と女性が使う出入り口（西）が別になっており、また、夜などに男性が語らう空間はマロカの東側、女性たちの空間は炉のある西側になっている。男性が使う出入り口側の外壁（東壁）は様々な神話に由来する幾何学的モチーフの文様で装飾されている。このことは、男性が儀礼の際に神話的モチーフの文様を顔に描くことに通じている。男性としてのマロカは、東側を顔＝口としているといえる。

マロカ内の主要な４つの柱は、人間の「大腿骨」などの長骨と同じ名で呼ばれる。主要な柱を南北方向に結ぶ梁は「鎖骨」と呼ばれ、屋根と側壁は「脇腹」と呼ばれる。つまり、マロカは人間の「身体」と同じ構造を持つのであり、儀礼のある段階では、マロカは人間の身体そのものにもなる。トゥユカたちにとって「世界」には４つの入り口があるが、同じように４つの入り口を持つマロカは「世界」そのものでもある。彼らの世界知によれば、身体と家と世界は相同[2] 的構造を持つ、互換的な存在なのである。

2　形状や機能は異なるが、系統的・発生的には同一起源であること。

これはシャーマンの道具立てにも現れる。シャーマンは、調製したヤヘの壺と、砂時計型のユイロと呼ばれるスタンド（人間の骨格を意味する）に載せたコカの椀（これは「生命の椀」と呼ばれる）を前にして椅子に座る。スタンドと椀のセットは人間の本質的な姿を示すものである。シャーマンのこの椅子もまた、4 方向に開かれていて世界やマロカと相同のものである。トゥユカのシャーマンとは、世界の上に座ってこれを保護し、絶えず四方を見張って、世界＝マロカ＝身体に危険が入り込まないように守っている人なのである。

食における男性性と女性性

性交なしに妊娠、出産はありえない。妊娠、出産という形を取らずにはいかなるものも生まれ得ない。男性的なものと女性的なものの間の性的交渉抜きには万物は存在しない。それが彼らの世界観である。例えば胎児は、男性的要素＝精液と、女性的要素＝月経血の混合物から形成される。精液は骨となり、月経血が血肉となる。これは単なる神話的解釈ではない。これは日常生活の基盤にある「知識」なのである。この知識に従えば、人間が健康であるためには、食事において、男性的要素と女性的要素をバランスよく摂取する必要があるということになる。

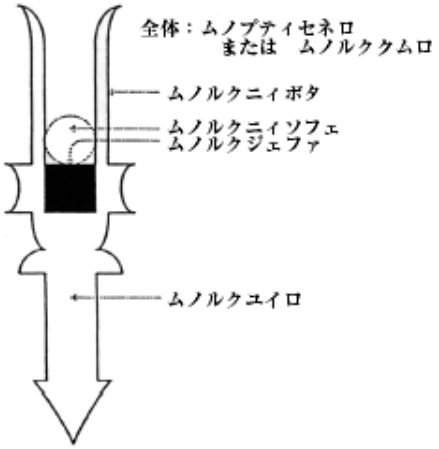
日常の食事（昼）で摂る食物のうち、キャッサバ、魚、肉などほとんどの食物は女性的要素であり、男性的要素であるのは唯一トウガラシだけである。このことは、離乳期から幼児期の子どもには生存のための過酷な試練をもたらす。7、8 歳までは多くの子どもが栄養不良だからである。夜（夕食後）や儀礼においては、霊的な（他界的な）食物だけが摂ることを許される。男性的要素としてタバコ（現地語ムノ）があり、女性的要素としてコカ[3] やヤヘがある。ヤヘを飲むのは儀礼の時だけである。

一方、昼／夜あるいはこの世（日常の生活世界）／他界（儀礼時の世界）を切り換える境界的な食物があり、それは液体である。マニクエラ（摺り下ろしたキャッサバからデンプンを取った上澄み液を長時間煮て無毒化した、甘酒のような飲み物）やチチャ（どぶろく）がそれである。

儀礼におけるタバコ

トゥユカの儀礼は、大きく二つに分けられる。イニシエーション（現地語マサクラウィ）と食物交換儀礼である。後者は、他のマロカコミュニティとの間で実際に食物を交換するが、霊的なレベルでは、魚、獣、木の実などの精霊たちとの間で行われる生命の交換（例えば、これから一年間どれだけの魚を獲っていいかについての相互の合意）を目的としている。これらの儀礼には、例えば「魚の踊り」のような名がついている。

タバコホルダー各部の名称



さて、イニシエーションにおいて使われるタバコホルダーは現地語でムノプティセネロ（ムノ＝タバコ、プティ＝置く、セネロ＝二股に分かれたもの）といい、長さ 20～30cm ぐらいの道具である。各部分にはムノルクジェファ（ジェファ＝大地）、ムノルクニィソフェ（ニィ＝子ども、ソフェ＝穴）、ムノルクニィボタ（ボタ＝長骨）といった名称が付けられている。儀礼の時は二股に分かれたムノルクニィソフェの位置に葉巻を挟んで

3　コカは、粉末に調製する際に葉柄や葉脈（コカの骨と呼ばれる）などを除いてしまうため、女性的食物である。

吸う。全体を逆さまにすると人間（とその陽根）の形に見えることもあって、これは男性を指すと長い間考えられてきたが、私は、葉巻は陽根だが、ムノプティセネロは女性であって、この形でタバコを吸うという行為は始原の男女の性交を指すのではないか、と考えている。「世界」を豊饒化する性交である。

イニシエーションで使われるタバコは、葉巻（現地語ムノ）である。イニシエーション以外の儀礼や、病気治しや森の仕事前の災厄除けなどの日常的呪術、日常的喫煙には、野生バナナの葉を管状に巻いたものにタバコを詰めたものが使われる。いずれも常にコカとともに消費される。バナナ葉巻の所有権はあくまでも作り手にあり、作り手が近親者に贈与することはあっても、他の者が「くれ」ということはない[4]。バナナ葉巻は病気治しや災厄除けなどの日常的な呪術で使われているが、80 年代後半以降は、市販の紙巻きタバコ（区別するためにスペイン語でシガリジョと呼ばれることもあるが、現地語ではこれもムノ）で代用するシャーマンも増加している。シガリジョはムノと違い、コカなしの単体で消費されることが多いし、持っている者に「くれ」と言ってもかまわない。

つまり、ムノは、コカと常に対になっており、もともとの神話的な男性性を持った状態で消費されているのに対して、シガリジョは神話的世界（霊的世界、本質的世界）とは全く無関係に消費されることもあるということである。他方、イニシエーション時にムノをシガリジョで代用しないのは、神話的意味の問題というよりはむしろ、太くしっかりと巻かれているムノ（葉巻）のほうが何十人と回し喫みをしても時間が持つ、という現実的な理由によるのではないかと思われる。

儀礼におけるコカ、ヤヘ

呪術的行為においてタバコと対で必需品なのは、コカ（現地語パットゥ）である。トゥユカの場合、専門職的シャーマンはマスターシャーマンの元で修業をするのだが、他方、呪文の根拠は神話であるので、神話をよく知る人は様々な呪文が使える。成人男性の誰もが最低でも一つか二つは得意な呪文を持ち、その意味では誰もがシャーマンである。成人であれば、コカは誰もが栽培するものであった。

コカを栽培する者は 80 年代後半以降急減しつつあるが、それは子どもたちの時間の多くが学校教育で占められると同時に、学校教育の中で伝統的文化を軽んじるように教えられてもいるからである。「白人（先住民以外の人間を指す。黒人も含まれる）」の生活様式への憧れもあって、コカの栽培を嫌い、一つの呪文も知らない若者が多い。

コカ栽培に対しては外部からの抑圧も顕著である。コカイン貿易を根絶したいアメリカ政府は当事国にさまざまな圧力を掛けてきた。その結果、ブラジル政府は先住民族のコカ栽培を禁止し、軍を派遣して先住民のコカ畑を焼き払っている。80 年代前半にこの地域にコカの葉を買いに来ていた麻薬組織が買い付けに来なくなったこともある。

タバコ、コカ以上に儀礼に欠かせないものにヤヘがある。イニシエーションではヤヘが主役である。木本性の蔓植物で、その蔓を短く切ってシソに似た野草の葉と一緒に臼で突き潰し、芯を取り除いて、粉砕された樹皮と葉を水に浸漬する。最後にザルなどで漉して飲用に供される。訓練を積んだシャーマンがヤヘによってもたらす感覚イメージは、幾何学文様からアニメーションのようなものまで多様であるが、すべては神話にルーツを持つビジョンであり、人びとの民族的アイデンティティに基礎を与えるものである。ビジョンは、生きる世界の真の姿（どんな存在も一皮剥けば人間と同等の人格的存在である）、つまり霊的世界の実相を教えるものであり、彼らの世界知を支えるものなのである。

4　日常的喫煙の場面でも、何人か集まると、所有者がバナナ葉巻に火を付けて、コカの粉末と一緒に回す。

ヤヘによるビジョンは未来を見せてくれる、と何人かのトゥユカたちに言われても、さすがに最初は信じがたかった。だが、そうした経験を繰り返すうちわかったことがある。数日程度までの近い未来に起こる出来事のビジョンは、全画面表示というか全空間表示というか、現実とまったく見分けが付かないほどリアルである。2、3 年程度の未来になると、スクリーンに投影したような小さな映像として現れる。ビジョンの見え方は、神話や過去に関するものでも同様のバリエーションがあり、場面の切り替えも、急流に乗っているような連続的に流れる展開があるかと思えば、神話時代から未来にいたる、折りたたまれた時間の上をあちこちへ跳躍していくような断続的な展開もある。このようなビジョンは、科学的分析をほとんど不可能にするが、非常に強力な現実構築力を持っており、だからこそ人びとの世界知に根拠を与え続けてこられる説得力を持ったのではないだろうか。

嗜好品化がもたらす変化

現在、このヤヘが観光資源化しつつある。コロンビアのシブンドイはもともとシャーマニズムで有名だったが、ヤヘ体験ツーリズムが盛んに行われていると聞く。また、ブラジルではヤヘの幻覚を利用する新興宗教（キリスト教のセクトとして）も出てきて、ヤヘを使ったミサを行っている。

さて、トゥユカたちにとって、タバコ（ムノ）、コカ（パトゥ）、ヤヘ（カピ）は単なるモノではなかった。それらは非物質的な側面と、固有の内在するエネルギーを持っており、かつトゥユカたちはそれをコントロールするための言葉を持っていた。

ところが、嗜好品としてのモノ、商品として扱われるようになると、非物質的な側面は消えていく。嗜好品化といった時に、土着的世界から外部へ持ち出されたものが流用されて世に送り出される場合（コカ・コーラ等）と、土着的世界の内部で生じる流用、あるいは、外部で流用されたものが土着的世界の中に入り込んでくる場合（シャーマンが日常的呪術でシガリジョを用いるなど）がある。

タバコやコカや、ヤヘを土着的世界で使っている限りは、少なくとも一定のルールやマナーがあり、それは変更されにくい。流用によって生じた利用法には、ルールがないか、あるいは全く別のルールが生まれるなど、複数のルールが併存することになる。土着的用法では乱用や耽溺にいたらないような価値と意味が与えられているが、流用によって生じた別のルールの中では乱用や耽溺が生じやすいように見える。2 つのルールの間の差は何か。その点の解明は今後の課題として残っている。

（了）

武井 秀夫／たけい ひでお●1948 年茨城県生まれ。1973 年東京大学医学部卒業後、外科医に。しかし、西洋医学の思考法や治療法に疑問を覚え、文化人類学へ。2013 年 3 月千葉大学を退官されるまで、北西アマゾンの先住民文化が、政治的に優位にある外部の西欧文化との接触によって変容をとげていく過程を調査・研究し、国際医療協力や「科学的」現代医療の抱える問題性を解明。共著に、『サイケデリックスと文化 ―臨床とフィールドから』（武井秀夫・中牧弘允編,春秋社 2002）等、論文に「医療における文化と心理 ―あるいは「苦」の人類学」（『社会心理学研究』第 8 巻 3 号,1993）、「幸福の心身論」（『言語と身体 ―聖なるものの場と媒体』岩波講座,宗教第 5 巻,岩波書店,2004）、「タバコとタバコホルダー ―あるいは宇宙大のインセスト」（『社会人類学年報』第 17 巻,1991）等。